

## 薬学新時代の大学院教育

平澤典保,<sup>\*,a</sup> 奥 直人<sup>b</sup>Education of Graduate School of Pharmaceutical Sciences in New Generation:  
IntroductionNoriyasu HIRASAWA<sup>\*,a</sup> and Naoto OKU<sup>b</sup>

<sup>a</sup>Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Tohoku University, 6-3 Aoba, Aramaki, Aoba-ku, Sendai 980-8578, Japan, and <sup>b</sup>School of Pharmaceutical Sciences, University of Shizuoka, 52-1 Yada, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526, Japan

薬学教育改革により、薬学部には6年制と4年制が並立された。そして平成22年度は4年制を選択した学生が大学院に進学する初めての年になった。この薬学教育改革により、薬学・創薬研究に携わる4年制大学卒業後の大学院生が大幅に減少することとなった。一方、将来の薬剤師の育成を担う指導者の育成には6年制薬学部卒業後の大学院での教育も必須であると考えられる。このような状況の現在、大学院の教育はどうあるべきかを議論することは、創薬研究者の育成並びに高度医療を担う薬剤師の育成を含む今後の薬学の方向性を明確にする上で重要であると考えられる。日本薬学会第130年会シンポジウム「薬学新時代の大学院教育」では、研究者及び薬剤師を育成するそれぞれの立場から、そして行政の立場から、薬学における大学院教育に今何が求められているのか、そして何を目指し、どのような試みが始められているのか述べて頂いた。これにより新時代における大学院教育の意義と大学院教育の目指すべき姿について議論した。多くの聴衆を迎え、短時間ながら大変有意義なシンポジウムになった。

富岡（東北大学）は6年制薬学部卒業後の4年制大学院のプログラムとして、高度医療を担う次世代型専門薬剤師養成のための実践的臨床薬学教育システムを構築するために、薬学研究科、医学研究科、大学病院の連携による試みを紹介した。入村（東大）

はグローバル化と多領域融合をキーワードに、薬学研究科の活動を紹介した。永井（岐阜薬科大学）は公立単科大学における大学院教育の新しい方向性として、他の大学、研究機関との連合大学院の設置があり、岐阜薬科大学での具体的な取り組みについて紹介した。大森（横浜薬大）は、自身の製薬企業での経験をもとに、創薬研究から大学院教育に望むこととして、製薬企業、ベンチャー企業、行政などを取り込んだ薬系大学院を中核としたクラスター形成を提唱した。奥（静岡県大）は日本薬学会の発展における6年制学部生、大学院生への期待と問題点を挙げた。吉田（文部科学省）は新たな薬学教育制度における大学院の在り方に関する検討会での内容を紹介し、今後の大学院設置における考え方を紹介した。

本誌上シンポジウムでは、これらの発表の中で、特に次世代型薬剤師教育としての大学院教育を目指している富岡、創薬研究を目指している大森、そして、行政面からの大学院の考え方について吉田の3人のシンポジウム内容を掲載することとした。現在、各大学では6年制大学の4年制大学院、4年制大学の博士後期課程の設置に向け、それぞれ独自のカリキュラム構築を目指していると思われるが、本シンポジウムがその参考になれば幸いである。

<sup>a</sup>東北大学大学院薬学研究科（〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉6-3）、<sup>b</sup>静岡県立大学薬学部（〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1）

\*e-mail: hirasawa@mail.pharm.tohoku.ac.jp

日本薬学会第130年会シンポジウム S24 序文